

日付:2015年1月11日／聖書:ルカによる福音書4:31～41

主題:「権威と力とをもって」

イエスは、悪霊に対し「権威と力とをもって」追い出すということが記されている。ここで言う「悪霊」とは何か。もう私たちは、聖書の読み方として、悪霊イコール、バイキンマンとか、何とかお化け・・・とは言えない。この「悪霊、汚れた霊」という聖書の表現には、どんな意味が含んでいるのか、そのことを押さえておきたい。

ルカ福音書3章の初めに記されているのは、周辺諸国の支配者、権力構造を書き並べて、その時代にどんな国際関係があり、その関係の中でどういう政治が行われ、民衆がどういう支配構造の中に置かれていたかということが最初に記されている。また、4章の初めには、イエスは悪魔から3つの誘惑を受ける。1つ目は「石をパンに変える」という誘惑。2つ目は「国々の一切の権力と繁栄を与えよう」という誘惑。そして3つ目は「天使をも支配下に出来る」という誘惑。その誘惑は、食・経済力、支配力、軍備力でこの世の支配権力の誘惑であった。しかしイエスは、その権力の誘惑を「権威」を持って退くのである。

その流れで見て行くと、会堂にも権力の霊に取りつかれた者がいたと考えられないか。その権力に取りつかれた霊を、イエスは「権威をもって・・・黙れ。この人から出て行け」と叱ったのである。・・・福音書の中に、神殿の境内で商売をしている現状にイエスは腹を立て、売り買いをしている人々を追い出すということがあった。会堂の中で不正が行われていたということは、十分に考えられることである。

次に、病をいやすということが記されているが、当時の病は、悪霊の仕業だと考えられていた。そして汚れた者は家から出てはいけなかった、触れてもいけなかった。そのことが律法に記されていたわけである。しかしここでイエスは、病に支配され、人間の尊厳をも奪う病、否、病というよりもそういう習わしを記す律法に対して「戒めて、ものを言うことをお許しにならなかった」のである。「イエスはその一人一人に手を置いて」触れて行くということをしていく。そのことがどんなに驚きであり、慰めであり、人間としての尊厳の回復に繋がることか。律法をも超えて行くイエスの業に対して「お前は神の子だ」と言わしめる力があるのだ。イエスは、様々な権力に対して「権威と力とをもって」お叱りになるお方である。(神谷)